

第4章 教育内容・方法・成果

(2) 教育課程・教育内容

【大谷大学短期大学部】

本学は、点検・評価項目のもとに独自の評価の視点を定め、点検・評価を行った。その評価の視点を小見出しにして本章(2)の評価項目(2)を記述する。

1、現状の説明

(1)教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

【短期大学全体】

本学では、第4章(1)で述べたように学則第1章総則第1条に掲げた本学の目的を具体化するため、仏教科、幼児教育保育科それぞれに教育課程の編成・実施方針を設けている(資料4(2)-1「大谷大学短期大学部学則」、資料4(2)-2『履修要項2014』pp.14-15)。各学科それぞれの教育課程の編成・実施方針に基づき、開講科目を共通科目・学科科目・自由科目の3つの科目群に分け、必要な授業科目を各学年に体系的に配当している(資料4(2)-2 pp.14-15)。

1. 共通科目

第1学年時には、必修開講科目として、既に述べた本学の教育目標(人物育成上の目的)を実現するために本学の建学の理念を伝える「仏教と人間」を、また、短期大学・学科への導入として「学びの発見」を開講し、短期大学で学ぶ基礎、特に本学の特色である仏教精神を学ぶ基礎を全学生が身につけられるよう科目を配している。また、仏教科「人間とこころコース」と幼児教育保育科では、社会のグローバル化に対応できるよう国際社会に生きる現代人にとって必須である「英語」を開講している。

2. 学科科目

本学では学則に定めた目的の下、各学科の教育目標(人物育成上の目的)を定めており、各学科はその目標を遂行するために学科科目を「講義」「演習」「実技」「卒業研究」という4つの科目群に分け、授業科目を順次的に開設している。各学科が目指す社会人・職業人として必要な豊かな感性と深い専門的知見を身につけることが可能となるよう、学科ごとに特色のある授業を開講している。詳しくは後述の各学科の項目で記載する。

3. 自由科目

学科の枠を越えて、学生が自己の関心や興味に応じて、積極的に受講したい授業を自由に履修できるようにしている。

【仏教科】

仏教科では学科の教育目標を実現するため、「人間とこころコース」と「実践仏教コース」の2コースを設置している。学科科目では、2コース共通して、仏教思想を初めて学ぶための基礎的科目や、学生の関心の度合いに応じて幅広く学べるよう、思想系・歴史系のさまざまな科目を開講している。フィールドワークやディスカッションを重視し、学生が主体的に学ぶことができるよう科目の編成を行っている。

「人間とこころコース」では、「人間」「こころ」「共に生きる」とは何かを本質から考え、多様な価値観を知り、豊かな人生観を養うことをめざして第1学年からゼミを開講している。

「実践仏教コース」では、仏教の教えによりながら社会を生きていく人物の育成をめざすという点から実践を重視し英語に代えて、「仏教と儀式Ⅰ・Ⅱ(声明)」という実践的

第4章 教育内容・方法・成果

(2) 教育課程・教育内容

【大谷大学短期大学部】

な科目を必修科目として開講し、こちらも第1学年時からゼミを開講している。本コースでは真宗大谷派教師資格取得が可能であり、資格取得のための科目も開講している。

2 コース制で各コースの特性に合った開講科目を開講していることで、学生の学修が効果的に行われており、学生の希望と教育内容のミスマッチを防いでいる（資料4(2)-2 p.23、p.28）。

【幼児教育保育科】

幼児教育保育科では学科の教育目標に基づき、全員が幼稚園教諭2種免許と保育士資格の取得をめざしている。学科科目では、そのために必要な基礎知識及び基礎技能の修得を目指す科目を開講している。特に、2年間という凝縮した期間に充実した学びを可能とするために、学科独自の入学前課題・導入科目の内容を考案し、幼稚園教諭2種免許及び保育士資格取得に関わる開講科目は、実践力のある保育者育成に向けて綿密な体系的編成を行っている。例としては、ピアノの授業（「音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」）を2年間4セメスター通じて開講する、教育実習・保育実習を基本的に第2学年時に実施する、等である（資料4(2)-2 p.25、pp.29-31）。

(2)教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。

【短期大学全体】

（短期大学士課程の教育内容）

(1)に示した教育課程の体系的編成のあり方を踏まえて、具体的に提供している教育内容について記述する（資料4(2)-2 pp.14-15）。

共通科目には、前述したように「仏教と人間Ⅰ」、「学びの発見」がある。「仏教と人間Ⅰ」は、本学の教育目標を達成するための根幹をなす科目である。また、初年次教育として「学びの発見」を開講し、各学科が独自の内容を考え、高校での学びから大学での学びにスムーズな転換が可能となるよう、また、各学科の教育目標に合うよう実践的な授業を行なっている。

学科科目では、各学科での資格取得をめざした実践的な授業も開講し、2年間という短い期間でありながら充実した教育内容となるよう開講年次に対応した工夫をしている。この点については学科別の記載箇所ですら詳述する。

そのほか、仏教科の「人間とこころコース」と幼児教育保育科では共通科目で「英語」を開講しているが、更に語学力を高めたい学生や他国の文化を知りたいという学生の要求にも応えるべく、自由科目で語学研修科目、文化研修科目といった科目も開講している。希望者は語学研修で中国、韓国、イギリス、カナダへ、文化研修でインド、中国、ドイツ、フランスへ行き、現地で語学や文化の学習をすることが可能である（資料4(2)-2 p.43）。

（教育課程の適切性の検証）

本学では、教育課程及び教育内容の適切性の検証にあたる組織は教育推進室と教務委員会教務部会であり、適切性の検証手続きは以下のとおりである。

教育推進室は、教務委員会教務部会と連携をとりながら、必要に応じて各学科及びカリキュラム責任者から意見を聴取する。また、GPA等のデータを収集し、検証を行う。検証

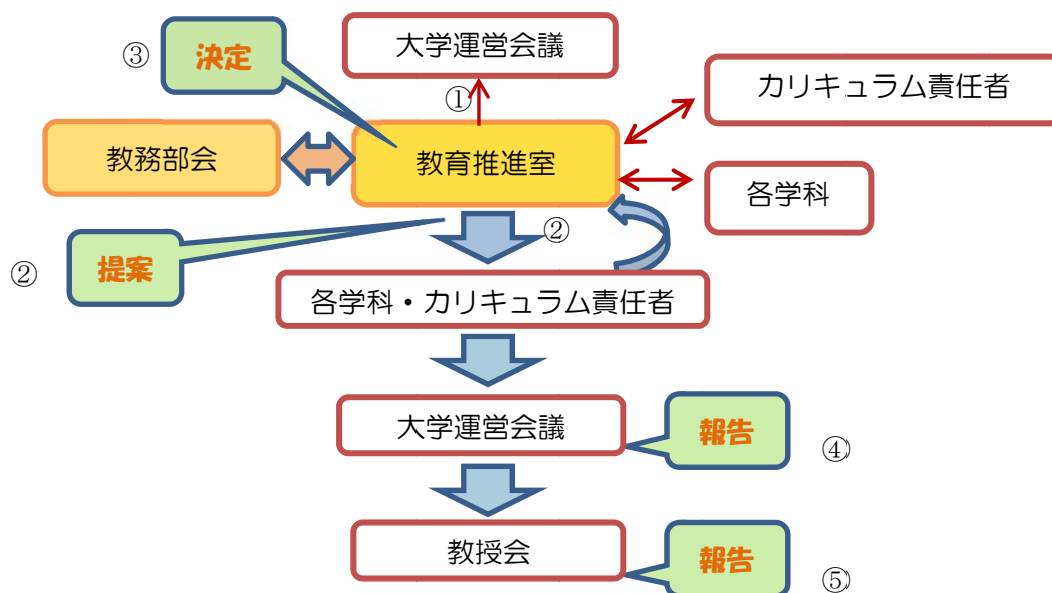
第4章 教育内容・方法・成果
 (2) 教育課程・教育内容
 【大谷大学短期大学部】

の結果、教育課程を改正する場合は、

- ①原案を教育推進室で作成
- ②大学運営会議に報告する（下図①）
- ③各学科・カリキュラム責任者に提案し意見を聴取（下図②）
- ④教務部会による了解
- ⑤教育推進室で決定（下図③）
- ⑥大学運営会議に報告（下図④）
- ⑦教授会に報告（下図⑤）。

となる。検証は年1回のペースとし、作業は教育推進室が中心となって行う。なお、この検証手続きは2013年度に整えたもので、2013年度末に一度活動の方向性を検証したばかりである。

【教育内容の適切性の検証手続き】



【仏教科】

(学科の教育内容)

第1学年では自分を発見する手がかりを探すことを目的に、ブッダや親鸞の人生や思想を学びながら世の中の多様な価値観を学べる教育内容を含んだ「ブッダのことば」や「親鸞のことば」を中心に、広く人間と現代社会の課題を考察する視点を養うことができるよう教育内容を工夫している。また、「体験」型授業として、「親鸞を歩く（京都フィールドワーク）」では比叡山登山や京都に点在する親鸞ゆかりの地を巡り、教室の中だけではない幅広い知識・知見を身につけることができる授業を提供している。

更に隔年開講の「ブッダを歩く（インドフィールドワーク）」ではブッダ生誕の地であるインド研修を通じて、仏教の遺跡や歴史、また日本とは異なる文化に直に触れるなど、実際に見て感じ、考える学びの場を提供している。

第2学年では、第1学年の教育内容を踏まえ、自ら思索することの大切さを更に深めて

第4章 教育内容・方法・成果

(2) 教育課程・教育内容

【大谷大学短期大学部】

いくために、「自己」を考える」などの講義科目を設定している。また、2年間という時間を考慮し、第1学年からコース別のゼミ（演習）を取り入れているが、特に第2学年の前期半ばから、ゼミにおいて2年間の学びの集大成である卒業研究に取り組むことになる。卒業研究は2年間の学びを通して見つかった課題に取り組み、主体的に思索し、自分の言葉で表現する機会として本学科における最も重要な位置をもつ科目である。そのために、文学部同様、主査と副査による口述試問を実施し、学生自身の学びの内容を教員とともに確かめ総括する機会となっている。試問後には論文の要旨を全員が作成し、『仏教研究紀要』に掲載する。また取組において優れた学生の卒業研究については同『紀要』に全文を掲載している。このように卒業研究の取組は2年間の学びの集大成であり、それを『仏教研究紀要』に掲載することで卒業生自身の学びの成果を確かめ公開する場を提供するとともに、新2年生に対して先輩たちの学びの内容を伝えることができ、教育的な効果を有しているといえる。

「実践仏教コース」における真宗大谷派教師資格取得科目については、必修「仏教と儀式Ⅰ・Ⅱ（声明）」において教師に必要な声明・儀式作法を教育内容に取り入れることで、実践的な実技の向上が実現できるように配慮している。

最後に本学科の教育内容の提供として最も大きな特長は、学生が自由に対話しお互い学びあう機会をもてるよう、常に短期大学部研究室を開放し、そこに常駐の専任教員がいるということである。短期大学部研究室では、授業の枠を超えて対話を重ねながら仏教科での学びをより深めていけるよう、日常的に工夫が重ねられている。

（教育課程の適切性の検証）

仏教科では2013年度に、教育課程及び教育内容の適切性の検証を含む、自己点検・評価を行うために「自己点検・評価報告書2013年度」を作成した。学科が目標を掲げ、その目標について達成基準と行動計画を示したうえで、当該年度の達成状況報告と点検・評価を行った。この「自己点検・評価報告書2013年度」は大学HPに掲載している（資料4(2)-3 本学HP「大学評価」）。なお、自己点検・評価報告書は毎年作成することになっている。

【幼児教育保育科】

（学科の教育内容）

「幼稚園教諭二種免許」と「保育士資格」の両免許・資格を取得するために各科目の教育内容に応じた開講年次を周到に配し、かつ、より実践的で深い子ども理解が可能となるよう学科行事と関連づけた教育内容を提供している。

第1学年では保育理論やさまざまな行事の企画・運営、各自のレベルに合わせたピアノレッスン等、多角的なアプローチから保育の基礎を習得できるよう教育内容を工夫している。また、保育の基礎を習得するため「園見学」や第2学年の実習体験を聞く「実習体験交流会」、更に卒業生を講師に招いて実際の仕事を知る機会を設ける等、実習の準備を手厚く行っている。

第2学年では第1学年時の学びを基礎とし、教育・保育実習と卒業研究への取組が教育内容の中心となる。幼稚園教諭免許に必要な幼稚園での実習と、保育士の資格取得に必要な

第4章 教育内容・方法・成果

(2) 教育課程・教育内容

【大谷大学短期大学部】

な保育園と児童福祉施設での実習とで、計5回の実習がある。また、自ら課題を見つけ、卒業研究の作成も並行して行っている。更に、学生たちが主体的に舞台発表を企画・制作する『幼教フェスティバル』の開催に向けて、保育実践に関わる科目、特に「保育内容・総合表現」で実践力を高める取組をしている。

また、保育職ではピアノが弾けることが必須であるため、ピアノの授業には重点的に力を入れており、ピアノ専用教室を完備して希望者には個別の丁寧な指導を行っている。

(教育課程の適切性の検証)

幼児教育保育科では2013年度に、教育課程及び教育内容の適切性の検証を含む、自己点検・評価を行うために「自己点検・評価報告書2013年度」を作成した。学科が目標を掲げ、その目標について達成基準と行動計画を示したうえで、当該年度の達成状況報告と点検・評価を行った。この「自己点検・評価報告書2013年度」は大学HPに掲載している(資料4(2)-4「大谷大学短期大学部自己点検・評価報告書2013年度」)。なお、自己点検・評価報告書は毎年作成することになっている。

2、点検・評価

●基準4(2)の充足状況

本学では、教育目標に基づいて短期大学全体の「学位授与方針」を、更に各学科の「学位授与方針」「教育課程の編成・実施方針」を定め、これらを踏まえたうえで教育課程を編成しており、同基準をおおむね充足している。

①効果が上がっている事項

(資格取得をスムーズにする教育内容の提供)

仏教科の「実践仏教コース」と幼児教育保育科は、スムーズな免許・資格取得が可能となるよう「教育課程の編成・実施方針」を立て、適切な教育内容を提供し、無理のない履修状況を実現している。

仏教科は2コースそれぞれの目的を学生に明確に伝え、入学直後の授業登録時から、2年間のバランスの取れた授業登録を行うよう履修モデルを提示して学生への履修指導を実施している。明確な資格取得をめざしたコースである「実践仏教コース」では、資格取得に教育の力点を置いて取り組み、英語の必修を無くし、代わって真宗大谷派教師資格に関わる開講科目を必修にする等、実践的な教育内容を提供している。

幼児教育保育科では、卒業生のほぼ全員が幼稚園教諭2種免許と保育士資格の両方取得しており、現状において学科の教育課程と教育内容が学科の教育目標に合致し、学生の学修が効果的に行われている。幼児教育保育科のカリキュラム編成と学科の取り組んでいる様々な行事が効果的に関連し、高い教育的効果をもたらしている。この幼児教育保育科の取組は2013年度の学内FD研修会においてカリキュラム構成モデルとして取り上げられている。

第4章 教育内容・方法・成果

(2) 教育課程・教育内容

【大谷大学短期大学部】

②改善すべき事項

(仏教科における必修・選択科目のバランスと履修年次)

「実践仏教コース」と「人間とこころコース」の2コースに移行する際にカリキュラムの見直しも行い、それまで必修科目として扱っていた科目の幾つかを選択科目に変更した。そのため、学年配当が第1～2学年になる科目が増えたことに加え、第1学年での履修科目が増加し第2学年での履修が減少する結果となった。2コース制にともなって減少した仏教学分野の授業を増やすために、「華道・書道」を「大乘経典を読む1・2」に変更する等、従来開講していた科目を別科目に切り替え、第2学年時に履修できる授業を新たに開講する等の方策をとっているが履修のバランスという点からは十分とは言えない。しかし、短期大学全体で開講数の制限や担当教員の配当問題等があるため、現段階では変更が難しい。

3、将来に向けた発展方策

①効果が上がっている事項

(資格取得をスムーズにする教育内容の提供)

2コース制にしてからの仏教科「実践仏教コース」では、教師に必要な実践力を更に磨ける課程に発展させることが入学者及び社会からの要請であると考え。したがってカリキュラム編成・教育内容を更に磨いていくために、学科において継続的に検証し充実をはかる。また、各学科が毎年行う自己点検・評価の機会を活用して、年ごとに変化する入学生に対応すべく、将来に向けて各学科の教員が、カリキュラム編成・教育内容について検証し、充実をはかる。

②改善すべき事項

(仏教科における必修・選択科目のバランスと履修年次)

困難ではあるが、カリキュラムの充実という視点から新規科目の可能性を検討するとともに、必修科目・選択科目そのものの見直しをはかり、バランスが取れた履修ができるよう指導を強化していく。

4、根拠資料

資料 4(2)-1 「大谷大学短期大学部学則」 (既出 (序-1))

資料 4(2)-2 『履修要項 2014』 (既出 (4(1)-4))

資料 4(2)-3 本学 HP 「大学評価」 http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/index.html

資料 4(2)-4 「大谷大学短期大学部自己点検・評価報告書 2013年度」

資料 4(2)-5 「短期大学部時間割表 2014年度」